

家康の経済・近世へ導く

徳川みらい学会歴史学者ら討論

徳川時代の歴史的意義を研究、発信する「徳川みらい学会」は15日、

本年度の第4回講演会「10thシンポジウム」(静岡工會議所共催)

を静岡市葵区の市民文化会館で開いた。歴史学者によるパネル討論を行い、「泰平の世に導いた徳川家康」をテーマに意見を交わした。

ともに静岡大名誉教授の小和田哲勇さんと本多隆成さん、静岡文化芸術大前学長の熊倉

功夫さんの3人が登壇した。

本多さんは家康の多岐にわたる経済政策の中で、1589～90年に本県などで行った検地「領国総検地」に注目した。「太閤(たいこう)検地と遜色ない内容」が忌避される時代にな

った」と独自の視点で分析した。同学会の活動が10年目を迎えたことを記念したシンポジウムで、市民ら約200人が聴いた。パネル討論に先立ち、小和田さんが基調講演した。

江戸時代中期にかけて

軍の中で「ひげを生や

していたのは家康だ

け」とし、「文化が平

準化され、個人の主張

が忌避される時代にな

った」と独自の視点で

分析した。

した。パネル討論に先

立った。小和田さんが基

調講演した。

小和田さんは、家康が戦国時代に終止符を打ったことで国内の人口が戦国時代末期から

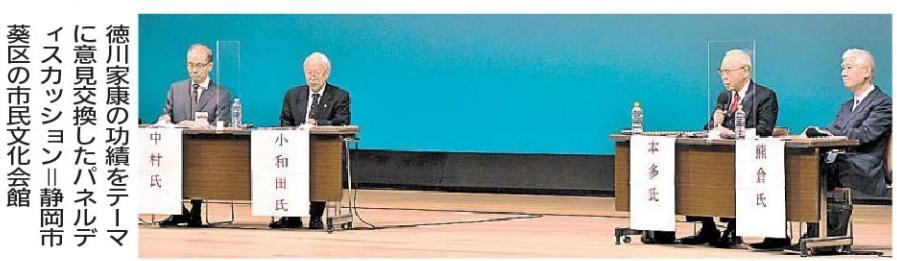
支配)態勢へと大きく転換するきっかけになった」と強調した。

中村氏

小和田氏

本多氏

熊倉氏



徳川家康の功績をテーマに意見交換したパネルディスカッション=静岡市葵区の市民文化会館